



下野新聞 認知症カフェ プロジェクト2022

オレンジコラム

第三回

受診の話をすると、
怒り出すのはなぜ？



「もしかして認知症？」と思って、どうしたら病院に連れて行くことができるのか、「受診の話をしたら途端に怒り出してどうすることもできない」といったご家族からの相談は少なくありません。

本書では、退職後も地域で責任ある役割をいくつも担い、夫や父として家族にも頼りにされていた輝夫さん（仮名）が、物忘れが顕著になり、心配した家族が受診を勧めると、普段の穏やかな様子から一転して、大声を出して怒り出してしまいう事例が紹介されています。そして、なぜ怒り出してしまうのかの理由が、脳科学の視点から紐解かれています。

輝夫さんは、認知症で訳がわからなくなつて、怒っていたのではありません。むしろ、「自分が認知症になったら、家族がもう自分を頼れなくなってしまう」「この家はどうなってしまうのだろう」という不安に駆られてしまったということ。そして、責任感が強いからこそ、「そんなことはあつてはならない」と感じ、怒りという強い反応が出てしまっていたということがわかってきました。

さらに、強い責任感を持つ人が、どうしたら病院に行けるのかということについては、前回のコラムでも出てきた、「安全基地」という概念が再び登場します。「安全基地」とはそこに帰れば安心できる場所のこと。これまで

永島 徹

とは明らかに違う本人の変化をいくつも感じた家族は、不安の中でいろいろな情報を集めて、受診を勧めることになると思います。しかし、家族の不安は本人の不安や混乱をさらに強くしてしまうばかり。本人に受診の話をする前に、家族の不安を整理することがとても重要なのです。家族が本人にとって「安全基地」と感じられるようになると、混乱や怒りなどの言動は驚くほど落ち着きます。そして、「忘れっぽくて、嫌になっちゃうよ」など本人が感じている不安な思いを口にするようになったら、受診を提案する良いタイミングかもしれません。受診は目的（ゴール）ではなく、これから家族でより良い生活をしていくための手段（スタート）です。そうなるために、ソーシャルワーカーである私の仕事は、ご本人の不安だけではないを伺うことから始まります。



NPO法人 風の詩 理事長
日本認知症ケア学会 理事
ながしま とおる
永島 徹
(認定社会福祉士・認知症ケア専門士)

なぜ、認知症の人は
家に帰りたいがるのか

脳科学でわかる、ご本人の思いと接し方

著者：恩蔵絢子 永島徹

定価：1,760円（税込）

発行：中央法規出版



私たちは「下野新聞認知症カフェプロジェクト」を応援しています。



企画協力

